

関東大震災

吉村 昭著

文芸春秋 A 5判 248頁

600円

災害は忘れぬうちにやってくる！大地震が関東地方を再び襲うだろうことを信ずる人は少なくない。私達は皆、今から50年前大正12年の関東大震災の激しさ、恐ろしさを、祖父母や親の体験談などによって知っているが、そこからは悪夢から覚めてみて、見た夢の恐ろしさを思い出すのに似て、断片的で漠然とした、「恐ろしかった」といううつろな記憶しかたどれない。また、今、大地震が起ったらどうなるだろうと想像してみても、個別的な現象は想像し得ても、個々の現象をひとつの有機的現象として関連づけ、かつ時間の経過の中でダイナミックに把握することはとうてい不可能なことである。私達はこの意味で既に大震災を忘れてしまっていると言ってしまうのではなからう。

膨大な資料と多くの人の体験談、証言を通して、しかもそれを大地震の発生、災害の進展の中で生き生きと甦えらせ、読者の目の前に大震災を再現してくれる本書は、「大地震はただもう恐ろしいものだ」という殻だけ残り中味がからっぽになった私達の記憶の器を埋め、思いつきのバラバラな想像力を補って、恐怖を現実のものとしてくれる。何ものも、体験に優る迫力は持ち得ないが、その個別的断片的なものをひとつの災害のダイナミズムの中に織り込み、初期微動、地響きとともに波打つ大地を読む者の体を感じさせることに始まり、それまで穏やかな日常生活にひたりきっていた住民を容赦なく旋風と火焰地獄のどん底に突き落とす災害それ自体を真に迫って描き出す筆のうまさに、読者は思わず引きずり込まれ、最後まで一気に読んでしまうことだろう。

著者の観察は未曾有の大災害に逃げ惑う群衆に向けられるばかりでなく、災害が一応落ちついた後、恐怖のあまり緊張の極に達し余震におびえ、何もかも失って呆然自失の罹災者や、的確な情報を得ることができず、自ら判

断する理性を失い、噂に惑わされ恐怖におののく群衆がどのように行動するか、また一見堅固に見える社会が根も葉もない噂にいかにか動揺するかに向けられる。情報化社会と言われる現代社会において、情報の糸が切れたときの混乱や社会の脆さを知る上で、多くの資料、記録、それに体験談によって描かれた当時の様子は大いに参考になるだろう。

本書が自治体職員に特に勧められる点として、第一に、困難を極めた救援作業や復旧作業、麻痺した都市の供給処理機能の回復の経過、様子が細かに書かれていることである。第二には、市民の生命と財産を守り、生活の利便のために自治体が平常行なっている警察、消防、供給処理およびその他の行政サービス機能が大地震をきっかけにまったく用をなさなくなってしまうことを真摯に受けとめ、真の大地震対策をどのように立てるべきかを考えるのに、多くの教訓と示唆を含んでいるということである。

災害を忘れ、無意識のうちに高度にシステム化したサービスに身を委ね、安逸の夢にひたりきっている現代都市社会、私達に対し本著は絶好の警鐘の書と言えよう。

<企画調整局企画課 池田武文>

あとがき

大地震の人間社会、とりわけ大都市への打撃は強烈である。過密都市は根底からその機能を崩壊し、市民の生命は危機に直面する。

現在「大地震は必ず来る」ということが学者のあいだでほぼ定説になっており、また大地震69年周期説による周期も迫っている折から、調査季報40号では「大地震の対策と不安」を特集にとりあげました。

地震によっておこる総合災害に行政の“総合性”がうまく対処しうるか。「地域防災計画」は有効にはたらくか。これらは、地震災害に対する2万5千の職員の認識及び市民参加の問題とともに、現在、行政に問われている緊急課題のひとつだと思います。特集の編集に当たっては、特に企画調整局企画課三木主査の協力をいただきました。

<杉浦>

6-30/8

調査季報

40

1973年12月15日

編集・発行——横浜市企画調整局都市科学研究室

横浜市中区港町 1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町 2-22